

## 論 説

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 5  
P.41 - 52 (2017)

## 子どもにとって「想像上の仲間」がもつ発達心理学的意義 — 6つの文学作品をめぐって —

### The Meaning of “Imaginary Companion” for Children From Viewpoint of Developmental Psychology

山 岸 明 子\*  
YAMAGISHI Akiko

#### 要 旨

本稿の目的は、「想像上の仲間」とは何か、子どもにとってどのような意義をもつのかについて発達心理学の観点から考察することである。まず「想像上の仲間」との関連が考えられる「移行対象」についてどのようなもので機能は何かを述べてから、「想像上の仲間」の意味や機能について先行研究に基づいて論じた。そして「想像上の仲間」の中で、空想の世界で共に遊ぶファンタジ的なものではなく、子どものつらい気持ちを支え適応に寄与する機能をもつという観点から6つの文学作品を取り上げ、どのような場合にそのような仲間がもたれ、どのように子どもを支えるのかの分析を行った。その結果、主人公のつらさを支え適応に寄与する「想像上の仲間」は1) 孤独で支えが必要な状況にある者の児童期・思春期に出現し、2) 児童期の場合には話相手になり共に体験をする者として現れ、思春期の場合には話相手という面もあるが、交流を通して自分を振り返る機会をもたらす。3) その仲間は基本的に自分と同質の者で、本人が自ら創造するが、意識的・意図的に創造する場合と意図しない場合があり、意識的でない場合の方が大きな問題を抱えている可能性が示唆された。

索引用語：想像上の仲間、移行対象、発達心理学、適応、文学作品

Key words : imaginary companion, transitional object, developmental psychology, adaptation, literary work.

#### 1. はじめに

我々は現実の世界だけでなく、空想の世界ももち、現実にはできないことを空想して、ストレスを発散したり楽しんだりすることがある。特に幼児期の子どもがぬいぐるみに話しかけたり、空想の世界で遊んだりする様子はよく見られる。子どもはなぜそのような行動をとるのだろうか。

近年、そのような「その姿は目に見えない(ぬいぐるみが生きている姿は現実には見えない)が、子どもと遊んだり相互作用をもつ者」が「想像上の仲間(imaginary companion)」として、発達心理学で実証的に検討されるようになってきている。本論で述べるが、そのようなものをもつ者がかなりいることも報告されている。想像上の仲間は、現実と空想の中間領域にあって子どもに影響を与えるという意味で Winnicott (1953) によって提唱された「移行対象(transitional object)」<sup>1)</sup> と関連があると考えられる。かつては想像上の仲間を

\* (元)順天堂大学

\* (before) Juntendo University

(Nov. 11, 2016 原稿受付) (Jan. 20, 2017 原稿受領)

もつ者は現実場面では不適応的とする見解もあったが、近年は移行対象と同様、子どもの適応に利すると考えられている。但し想像上の仲間が本人にとってもつ意味や機能は様々で、場合によって異なると考えられる。

本稿では想像上の仲間とは何か、子どもにとってどのような意義をもっているのかについて発達心理学の観点から考察を行う。まず想像上の仲間との関連が考えられる移行対象についてどのようなもので機能は何かについて述べてから、想像上の仲間の定義や実態、どのような意味や機能をもつかについて先行研究に基づいて論じる。そして想像上の仲間の中で、子どもを支えて適応に利するものが登場する文学作品を取り上げ、どのような場合にそのような想像上の仲間がもたれ、どのように子どもを支えるのかを文学作品を通して考える。

## II. 移行対象の機能・意義

生物は常に不均衡に曝され、均衡がとれた状態に戻すホメオスタシスの機能により生命を維持している。人間の生活は生物学的不均衡だけでなく、様々なストレスに曝され、日々不快なことへの対処を迫られている。しかし人間の乳児は無力・未熟な状態で生まれるため、発達初期は不快事象への対処を自分で行うことはできず、泣くという形で不快な事を発信し、それを読み取ってくれる養育者に頼るほかはない。自分の不快感を読み取りそれを除いてもらった時、乳児は快感と安心感をもつ。そのことがその者への愛着形成につながっていく (Bowlby, 1969)<sup>2)</sup>。乳児も発達とともに不快事象への対処に能動的にかかわるようになっていく。母親への基本的信頼感を獲得した乳児は欲求がすぐに充足されなくても、やがて充足されるという予測をもって待つことができるようになるし、認知能力や身体的能力の発達によって自分でストレスを排除することも少しはできるようになっていく (例えば指を吸ったり、まわりを見渡す等)。

更に乳幼児は、愛着対象とは別に特別の愛着を寄せる特定の対象をもつようになり、愛着対象である母親がいなくてもそれによって安心感や慰めを得て、自分を宥めることができるようになる。Winnicott はそれを移行対象とし、「乳幼児が肌身離さず持ち歩き、それがないと著しい不安を示す毛布、人形やぬいぐるみ、その他の無生物」と定義づけている<sup>1)</sup>。移行対象になるのは柔らかく暖かいものであるが、その特性は母親のもつ特性であり、幼少期の母親の代理物であり、象徴として用いることで分離不安に対処するのである。移行対象は母親と分離して緊張やストレスを経験した時や、心理的にも物理的にも母親と離されることになる入眠時に使われることが多い。より発達が進めばそのような現実と空想の中間領域ではなく、愛着対象の内的表象によって支えられるようになっていく。

移行対象には、1才前後までに現われる毛布やシーツ等の布類 (一次的移行対象) と、主に2才前後から現われるぬいぐるみや玩具に対する愛着 (二次的移行対象) がある<sup>3)</sup>。感覚的な部分対象である一次的移行対象から、人格的な側面をもつ二次的移行対象へと進むといえる (井原 (2006) は人格的な部分が発展したものとして companion animal を三次的移行対象としている<sup>4)</sup>)。

そして安心感や慰めを得て自分を宥めるという機能は、乳幼児期に限らずその後も存続し、タオルやぬいぐるみだけでなく、ペットやコレクション、本、音楽、お祈り、想像上の仲間等、様々なものが精神的、身体的苦痛を和らげ、安心感や慰めを得ていることが指摘されている (Horton, P.C, 1981).<sup>5)</sup>。

移行対象はかなり多くの者に持たれていることが報告されている。出現率には文化による差が見られ、欧米に比べて日本や韓国は低い。授乳形態やスキンシップの量が関係しており、就寝も幼少期から一人というように一人であることを強いられた文化では母親の代理物をもつことの必要性は高くなると考えられる (遠

藤、1990)<sup>6)</sup>。

Winnicott が提唱した当初は幼児フェティシズムの問題と関連づけて病理的なものと考えられていた(遠藤、1990)<sup>6)</sup>が、Winnicott はポジティブなものと考え、健全な発達の指標ととらえている<sup>1)</sup>。移行対象は母親不在という子どもにとって最大のストレスに対して、子どもが何とか自分の力で対処したものと言える。ストレスへの対処には、ストレスを実際に取り除く問題焦点型の対処と、取り除くことはできないが気持ちを宥めることでストレス状態からは逃れる情動焦点型の対処があるが<sup>7)</sup>、移行対象は後者の対処になっている。またストレスへの対処にはサポートを求めるという方法もあるが、母親だけに求めていた乳幼児が、他のものにサポートを求めて、現実の他者に頼らずに情緒的サポートを得ることに成功したとも言える。

### III. 想像上の仲間

I でも述べた様に、近年発達心理学では「想像上の仲間」に関する研究が盛んに行われるようになってきている。それらの研究の多くは Svendsen(1934)<sup>8)</sup>に従って、想像上の仲間とは「目に見えない人物で、名前がつけられ、他者との会話の中で話題となり、一定期間(少なくとも数ヶ月期間) 直接に遊ばれ、子どもにとっては実在しているかのような感じがあるが、目に見える客観的な基礎を持たない。物体を擬人化したり、自分自身が他者を演じて遊ぶ想像遊びは除外する」という定義をあげている(例えば山下 2001<sup>9)</sup>、山口 2006<sup>10)</sup>、森口 2014<sup>11)</sup>)。想像上の仲間は invisible friend (目に見えない友達：以下 IF と略記) であるが、ものが擬人化された personified object (人格を与えられたもの：以下 PO と略記) - 例えばぬいぐるみ - は、目にみえるという意味で「想像上の仲間」とはされないが、目に見えても子どもが空想の中で友達としている場合は含まれるとする研究者もいる (Taylor<sup>12)</sup>, 1999, 森口, 2014<sup>11)</sup>)。

想像上の仲間がどの程度見られるかについては、調査方法 (①子どもに直接聞く ②養育者に聞く ③大人に回顧してもらう) によって異なるが、森口(2014)<sup>11)</sup>のレビューによれば、幼児の場合 IF、PO 共 2 割 (アメリカ①)、IF 3~4 割、PO 1 割程度 (オーストラリア・イギリス・アメリカ・ニュージーランド①②)、日本では① IF 1 割、PO 4~6 割、①② IF 1 割、PO 4 割程度に見られている。(上記のレビューにはないが日本の回顧研究③では IF が少し多く 1.5 割程度みられている(麻生 1989<sup>13)</sup>、森定 1999<sup>14)</sup>)。日本では IF は西欧よりも出現率が低く、PO が多いという特徴がみられている。

出現時期に関しては、犬塚ら(1991)<sup>15)</sup>や森定(1999)<sup>14)</sup>の調査(大学生・専門学校生の回顧研究)では発現開始は、5・6才と10才にピークがあることが示されている。山下(2001)<sup>9)</sup>も高・大学生の回想法では小学生から中学生時代が中心、子ども自身の回答では2~6才が多いこと、Nagera,H.(1969)<sup>16)</sup>も第1期は2才半から3才、第2期は9才半から10才にかけてであるとしている。

更に山下(2001)<sup>9)</sup>はこの2つの時期の想像上の仲間は以下の点で違いがあるとしている。どちらも未熟な自我を支える機能をもつという点では共通しているが、第1期の想像上の仲間は移行対象の延長で、分離個体化の不安や葛藤を防衛するのに対し、第2期は家族から同性・同年齢者集団に関心が移ることでもたれる不安や抑鬱感の緩和や、家族に代わる新しいモデルや準拠の提供というように機能が異なる。更に第1期の想像上の仲間をもつ者は活動的で友人とよく遊び、他者にオープンに語られるのに対し、第2期の想像上の仲間は思春期の自分独自の世界の萌芽であり秘密にされること、第3に、第1期の場合は児童期になるとほとんど忘れられるという違いがある。

なぜ子どもは想像上の仲間を作るかその理由について発達心理学者 Taylor (1999)<sup>12)</sup>は以下の9つをあ

げている。1. 楽しさと仲間の獲得 2. 孤独への対処  
3. 有能感や自尊感情の経験 4. 現実の生活での制限  
や限界を超えること 5. 非難・責任の回避 6. 恐怖  
への対処 7. 他者とのコミュニケーションの手段  
8. 心的外傷に対する反応 9. 興味深いあるいは重要な  
出来事や人物を処理する方法 以上である。

それらを大きくまとめると、A. 現実のストレスフルな状況に何とか対処するー孤独で寂しい時に一緒にいてくれる・怖い時に強い味方としていてくれる・非難されそうな時代わりに非難の対象になってくれる等  
B. 想像の中で仲間を得て楽しく遊ぶ C. 現実にはアプローチできないことを想像の中で実現させるー現実には感じられない有能感や自尊感情を経験する・現実の生活では制限されていたりうまくいかないことがうまくいく・興味深いあるいは重要な出来事を再現させるの3つに分類できる。それらを「つらい気持ちを宥めてくれる」という移行対象の機能の観点から見ると、Aは移行対象の機能を果たすものといえる。Bは基本的には移行対象と機能は異なるが、楽しく遊ぶ中でつらい気持ちが宥められるということもあるという点で関連性はあると考えられる。Cの「現実にはアプローチできないことを想像の中で実現できる」ということは「ごっこ遊び」の特性である。想像上の仲間もそこに登場することが考えられるし、A、Bを可能にする要因でもあるが、つらい気持ちを宥めるという移行対象の機能とは異なるといえる。

#### IV. 物語や小説に登場する「想像上の仲間」の分析

幼児期は空想の世界をもち、「ごっこ遊び」としてないものがあるかのように思って遊ぶ時期であるし、子ども達は空想の入ったお話を喜ぶため、絵本や子どもを描く児童文学にはファンタジーものは多い。そして現実の仲間だけでなく想像上の仲間を入れることで内容がより楽しく豊かになるために、想像上の仲間が登場する作品も多い。

IIIで述べた様に想像上の仲間には色々なものがあり、絵本や児童文学にもファンタジーとしてあるいはより切実な問題として様々な想像上の仲間が登場するが、本章では単なる遊び仲間ではなく、つらい時に情緒的安定をもたらしたり適応にプラスに働くような想像上の友人が描かれた作品を取り上げ<sup>〈脚注1〉</sup>、彼らが出現する時期、出現状況、主人公との類似性、主人公の意識性（意図性）、彼らが果たす機能・役割について検討し、どのような者が主人公にどのような影響を与えていると描かれているのかについて、発達心理学の観点から分析し考察を行う。

#### 1. 「アンネの日記」<sup>18)</sup>のキティ、「赤毛のアン」<sup>19)</sup>の2人の女の子、「悪童日記」<sup>20)</sup>のクラウス

主人公達は、程度の差はあるがつらい状況に置かれていて、それにもかかわらずつらさを宥めてくれる人がいないという点で共通性がある。幼児期から児童期の子どもは母親を中心に大人に愛着を向けて心理的安定感を得るが、発達と共に愛着を向ける対象が広がり、児童後期から思春期、青年期になると同性の友人＝親友もその役割を担うようになっていく。そのような意味で経験を共有し共感的に分かり合う親友の意味が大きくなっていくが、それまで愛着を向ける対象に恵まなかったり、親しい他者がいなかった場合は、その意味は特に大きくなると考えられる。つらいことがあった場合、一般的にはこの時期の子どもはまだ大人の愛着対象によって慰めを得ているが、ここで取り上げる主人公はそのような人がいない状況にあり、移行対象として、あるいは新たな愛着対象として友人を求め、それが叶わないために想像上の友人を自分で作り

〈脚注1〉ミルン .A.A. の「くまのプーさん」<sup>17)</sup>は、もともとクリストファー・ロビンがいつも持っているぬいぐるみで、第二次移行対象である。それを父親がお話にして、プーさんは生きた仲間として一緒に遊ぶことになった。もともと「母親と一緒にいないというようなつらい時に情緒的安定をもたらすもの」であったが、お話の中では、特にそのような場面はなく、単に空想の中で一緒に遊ぶ楽しい仲間であるため、ここでは取り上げない。

出している。

「アンネの日記」は想像上の友人に語りかける日記として有名だが、以下の文章で始まる。「あなたになら、これまで誰にも打ち明けられなかったことを、何もかもお話しできそうです。どうか私のために、大きな心の支えと慰めになってください。」(1942年6月12日)日記をつけ始める理由について「本当のお友達が私にはいないからです」と書き、「日記帳を心の友として、今後わが友キティと呼ぶことにしましょう」としている。

アンネはナチスの目から逃れるために不安で不自由な生活を送っていたが、但し日記はごく普通の、自我を発見し自分を見つめるようになった思春期の少女の日記—自分との対話の要素の強い日記である。彼女の場合は、特に愛着対象に恵まれなかったわけではなく(母親との関係はよくなかったようだが、父親とはよい関係を持ち、普通の友人は沢山いる)、また隠れ家に住むというつらい状況への直接的対処としてあるわけでもない。しかし想像上の親友を作り話しかけることで、思春期そして不自由で不安な隠れ家生活に伴う不安定な気持ちを安定化させることに役立っていると思われる。

「赤毛のアン」は、孤児で誰からも愛されたことがなくつらい状況を生きてきた少女の成長物語である。アンは幼少期に両親が亡くなるが、引き取り手がなく仕方なく2件の家に引き取られるが、どちらの家でもやさしく扱われることはなく、子守りとしてこき使われて、その後孤児院からグリーン・ゲールズにやってきてやっとよい人々に会うことになる(詳細は山岸2015<sup>21)</sup>参照)。

アンは2件の家では、学校にもほとんど行っておらず、家で沢山の子供の世話をする生活をしてきた。友達は全くいなかったが、アンは8才までいた家で、本箱のガラスに映る自分の姿を、ガラス戸の向こうに住んでいる女の子だと想像してケティ・モーリスと名付

け仲良くしていたと語る。「日曜日には何時間も話しかけたわ。ケティには何でも話したの。とても楽しかったし、慰められたわ。」次の家では本箱はなかったので、家から少し離れた小さな谷で聞こえるこだまを小さな女の子だということにしてヴィオレッタと名付け、仲良しになった。孤児院では腹心の友を作る気になれなかった。

移行対象は愛着対象が不在の時にそれに代わるものであるが、アンの場合は(彼女の語りによれば)愛着対象はおらず、温かい関係も一切なく、移行対象をもつ前提条件がない。愛着対象をもたないまま、児童期の友人を想像で作あげ、唯一の温かい関係を創造し自らを慰め力づけていたといえる。

「悪童日記」3部作の第1巻「悪童日記」は愛着対象の母親から離され、戦時下の悲惨な状況を二人で強く生き抜く双子の少年「ぼくら」の手記である。しかし実は、彼らは4才の時家庭が崩壊して離れ離れになり、別々の人生を歩んでいたことが次巻で明らかにされる。そして1巻の手記は双子の一人であるリュカが一人で書いたものであることが明かされ、その後もリュカは双子の片割れのクラウド宛に生涯にわたって手記を書き続ける。(山岸2015<sup>22)</sup>参照)。

つまり戦時下の悲惨な状況を生きていた時、リュカは実際にはいないクラウドがあたかも一緒にいるかのように想像し、つらい経験を共にしたことにして手記を書いていたのである。遠くにいて現実には会えない人から精神的支えを得るといえることはよくあるが、リュカの場合は現実にはそこにいない人を一緒にいることにしてしまい、「想像」の上で共に生きる仲間を作っているのである。1巻の最後で二人は別れたと記され、その後リュカはクラウド宛に日々の経験をずっと書き続ける。

幼少期の幸せだった生活と愛着対象を失い、その後劣悪な状況で生き、誰からの愛も支えも得られないリュカにとって、幼少期を共に過ごしたクラウドが自

分を支える唯一の人になる。何の連絡もくれない母親を支えることができないリュカは、クラウドを「想像上の仲間」とし、二人でつらい状況を耐える方法を考え実践し、それを書くことにより辛うじて孤独でつらい状況を耐えていく。その後も、唯一の支え、慰めとしてクラウドに宛てて日々の経験を書き続け、彼と再会することだけを望みながら生きていく。

クラウドは双子の片割れで現存する人物ではあるが、4才の時に分かれその後全く連絡がとれず、会うあてもない人物である。リュカは4才以降、見知らぬ人々の中で過ごし、幼少期の情報も全くないため、クラウドはリュカの望みのすべてでありながら、実在感はあるかではない。第3巻でリュカは自国に戻りクラウドを探すが、リュカの夢の中で二人は次のような会話をしている。「ぼくが帰ってきたのはおまえのためなんだ」「ぼくのためだって？ よく知っているじゃないか、ぼくは一つの夢にすぎないんだよ」またリュカは警部に「自分の兄弟のことを言いましたが、多分現実には、そんな兄弟は初めからいなかったんです」と言っており、現実にはいない可能性も感じていて、実在する人物というより「想像上の仲間」に近いと思われる。

現実の人と繋がることができないリュカ（詳細は山岸 2015<sup>22)</sup>参照）は、児童後期から思春期という時期だけでなく、つらい人生を生き延びるために生涯に渡って「想像上の人物」を必要とし、そして再会を果たすことなく絶望して死んでいくのである。

## 2. 「いけちゃん」とぼく<sup>23)</sup>のいけちゃん

いつもそばにいて、つらい時に慰めてくれるという移行対象の機能をもつ想像上の仲間がうまく描かれている作品である。主人公のぼくは、父親が病気で（やがて亡くなる）母親が働いているためか、いつも一人で寂しく過ごしている小学生である。ご飯を食べるのも、お風呂に入るのも、寝るのもいつも一人。でもいけちゃんという正体不明の生き物がいつもそばにいて

くれる。

いろいろなエピソードが語られている。ご飯は用意されているけれど、だれもいない家の中は真っ暗。でもいけちゃんがやって来て、滅茶苦茶なご飯の食べ方を教えてくれて、2人で楽しく盛りあがる。学校でいじめられ、腹いせに虫に残酷なことをしたり、ちょっとした悪さをするぼくの横にいて気持ちが鎮まるのを待っていてくれたり、「今日は2回殴り返せた。泣かずに怒っていたよ」とまだまだめげているぼくを励ましてくれる。シャンプーをする時、目をつぶって暗くなるのがこわいと言えばピターッとくっついていてくれ、一人で寝るのがこわい、夜中にトイレに行くのがこわいと言えば一緒についてきてくれる。

まだ親からの保護が必要な時期なのに（「世界には人より早く大人にならないといけない子がいて、君はその一人なんだよ」といけちゃんに言われている）いつも孤独でつらいことが多いぼくは、いけちゃんがそばにいてくれて、共に遊び、気持ちを共有し、時に慰めてくれることで、何とかつらい状況を乗り越えている。安心感を与えてくれる母親がいなくてつらい時に、それに代わって不安な気持ちを鎮め安心感を与えてくれる移行対象の機能を果たしているといえる。ドラえもん<sup><脚注2></sup>のように特別な力をもっていて問題を解決してくれるわけではないが、ストレスに対する情動中心の対処をしてくれる。

そしていけちゃんは「でもいつまでもいけちゃんはそばにいられないから、外に出て友達をみつけて、早くゆっくり大人になってね」と言って、ぼくがしっかりして一人でやっていけるようになると徐々に離れていき、やがて全く姿をみせなくなるのである。これは大人の役割であり、その代わりである移行対象の本質

<脚注2>ドラえもんも、いじめられっ子でドジなび太くんのそばにいつもいて助けてくれて、不安な気持ちを鎮め安心感を与えてくれる（それだけでなく問題解決型の対処もしてくれる）仲間だが、ドラえもんの場合は「想像上」ではなくて実在していて、他の人たちにも見える点で「想像上の仲間」ではない。

でもあろう。

いけちゃんは移行対象の機能をもった想像上の仲間だが、1と違うのは、本人と同じような人物ではなく異質な生き物ということ<sup><脚注3></sup>、そして本人が作り出したわけではないことである（そのことは最後に説明されている。いけちゃんは実は老年期に出会った恋人が子ども時代のぼくを見るために、その時代に戻って「ぼく」のそばにいたのである）。その意味でこの作品は心理学でいう移行対象や想像上の仲間とは少し異なるが、つらい状況にある児童がそのような存在を必要とし、それに支えられてつらい状況を乗り越え何とか生き延びるといったテーマは著者も持っており、その点では一致していると考えられる。

### 3. 「思い出のマーニー」<sup>25)</sup>のマーニー

この作品に登場する想像上の仲間は1と同様主人公と似た人物であるが、主人公が意識的・意図的に作り出した人物ではない。主人公の意図とは独立に現れるが、しかし主人公が意識せずに自ら作り出した想像上の仲間と考えられる。

主人公は周囲の人に心を開かず友人もいない、孤独でひねくれた12才のアンナ（ジブリのアニメ映画では杏奈）である。彼女は自分を一人残して死んでしまった両親、そしてその後引き取ってくれたが同様に死んでしまった祖母を恨み、育ててくれている継父母にも心を開かず、自分のことが嫌いな少女である。彼女は喘息がひどくなり周りの大人の配慮もあって、ロンドンからノーフォーク（映画では北海道の湿原のある町）に療養に行き、そこで一夏を過ごすことになる。そこには海と続いている湿地に建つ古い館があり、アンナはそこに住む魔法めいた雰囲気のある金髪の少女マーニーと出会い、友達になる。そのマーニーはアンナにしか見えない「想像上の仲間」なのだが、アンナはマーニーとの交流を通して、閉じていた心が開かれていく。

マーニーはなぜアンナの前に現れたのか、色々な解

釈がなされているようである。祖母がうまく生きられないアンナを支えようとして現われた、あるいはアンナを支えようとする祖母の強い思いがアンナを引き寄せ、アンナの夢に現われ、アンナに幻覚を見させた…。死んでしまった祖母の心残り、強い思いによって不思議なことが起こったと解釈する者もいるようである。

「想像上の仲間」は本人の内面の問題であるため、一般的には本人に由来すると考えられるが、アンナは孤独でも1の主人公たちの様に友人を求めてはいないために、超心理学的解釈がなされるのだと思われる。アンナは館を見た瞬間に、「自分が無意識に探していたのはあれなんだ」と直観的に思うのだが、河合(1981)<sup>26)</sup>は「アンナは屋敷を父母未生以前から知っていたのだ」「それはたましいの国に他ならなかった」という解釈をしている。しかしアンナが館を見たことがあるように感じたのは、覚えていないけれど幼い時に祖母から渡された館の絵葉書を大切にもっていたからであり、その絵葉書を渡してくれた祖母を無意識的に思い出し、それがマーニーという姿になって現れたと解釈することができる。物心がついてからずっとつらい思いをしてきたアンナの心に、幼い自分を愛してくれたよき者が甦り、彼女はそれを現実には得られないよき友にした。幼少期だったため、祖母の愛や思いは明確に覚えているわけではなく意識には残っていないが、幼いアンナに伝わっていたのだろう。そして祖母から聞いた話と自分の心の中にあった望みを合わせながら、2人の交流を創造していった。それらは意識的になされたものではないが、アンナが自分で考えた2人の交流が本人を支え癒すように機能するのである。

<脚注3>人間ではない異種の生物と交流をもつという作品も数多い（例えば「となりのトトロ」<sup>24)</sup>のトトロなど）。それらは本人が作り出したというより、実在あるいは文化として存在しているが、大人あるいは他の人には見えないが、主人公の子どもには見え、それと交流するという話である。「情緒的な支えを得ること」よりも「一緒に遊ぶ」あるいは交流をもつことが中心であるという点でも、本稿でとりあげるものとは異なっている（「トトロ」ではねこバスに助けってもらったり、サツキとメイがトトロと空を飛ぶ場面では安定感を与えられているかもしれないが、副次的である）。

誰からも愛されていないと感じ誰にも心を開けなかったアンナは、自分がマーニーを愛していること、マーニーに愛されていることを確信する（想像の友人と交流する中で幼少期の愛された経験を確認し、自己概念を変えていく）。また自分の不幸だけを考えていたアンナは、マーニーの不幸を知る。そしてマーニーが風車小屋で自分を置いて急にいなくなったことを許した時、祖母が自分を置いて病気で死んだしまったことに対する恨みを解消し、人生に対する態度を変えることになったと考えられる。

この話は、実はアンナだけでなく、親に愛されていないという意識にとらわれた3代の女の子の話である。祖母は社交に忙しい両親からネグレクトされ親の愛を受けず、身近にいたばあたちからもいじめられるという子供時代を過ごした。折角幼なじみの愛を得て結婚し娘が生まれるが、戦争で爆撃を逃れるためにアメリカに送ることになる（映画では夫が亡くなり、祖母は体をこわしてしまったため仕方なく娘を寄宿舎に入れる）。仕方がなかったのだが、娘はそのことを恨み母親に対して心を閉ざしてしまう。そして娘は家を出て結婚するが、アンナを産んだ後離婚し、その後車の事故で死亡する。アンナは祖母に引き取られ可愛がられて育つが、やがて祖母は病気で亡くなる。アンナの意識には明確に残ってはいないが、祖母は孫のアンナに愛を注いでくれ、その経験が後の想像の友人の創造につながり、その友との交流によって3代に渡る不幸が取り除かれたといえる。アンナが変わったのは、幼少期に受けた祖母の愛、そして現在の養父母やアンナを預かっている夫婦の対応が関与していると考えられるが、直接のきっかけは「想像上の仲間」マーニーであり、それを作り出したアンナの立ち直る力だといえる。

#### 4. 「海辺のカフカ」<sup>27)</sup>のカラスと呼ばれる少年

カラスと呼ばれる少年は思春期の主人公田村カフカ

少年が作り出した「想像上の仲間」であるが、1から3と異なるのは、この仲間は本人とは異なった観点から意見を述べたり助言したりし、必ずしも共感的なだけではない点と、仲間であると同時に、自分の考えについて再検討しようとする「もう一人の自分」の要素をもつ点である（「アンネの日記」のキティも「もう一人の自分」の要素をもっているが、但しキティはいつもアンネと同じ立場に立ち共感的である）。自分で創造したかどうかは明確ではないが、意識的に作ったわけではなく、3と同様知らない内に頭の中に住み着いていたと思われる。

田村カフカは非常に歪んだ家庭環境で育ち（母親は幼少期に姉だけ連れて家を去り、父親からネグレクトされ、心理的虐待を受ける）、誰からの愛情も配慮も受けず、ほとんど人と話すこともなく、笑った記憶もないという少年である。彼には友人は全くおらず頼る人も皆無だが、時々カラスと呼ばれる少年が現れ、彼に話しかけ、相談にのってくれる。カフカ少年は15歳の誕生日に家出をして、知り合いも全くいない四国に行き、困ったこと、どうしたらいいかわからないことに次々に直面するのだが、カラスと呼ばれる少年は、カフカが感じていること、やろうとしていることを言語化・明確化し、またヒントや助言を与えてくれ、自信をなくしていると励ましてくれる。

例えば田村カフカが「僕は自分が絵の中の少年に嫉妬していることに気づく」と、カラス少年はすぐにその気持ちや内容を詳しく説明している。本の最後では「僕は正しいことをしたんだろうか」と自問するカフカに、「君はいちばん正しいことをしたんだ。ほかのだれをもってしても、君ほどにはうまくできなかったはずだ」と認めて励ましてくれ、「でも僕にはまだ生きるということの意味がわからないんだ」というと「絵を眺めるんだ。風の音を聞くんだ」「君にはそれができる」「眠ったほうがいい」と助言し、目が覚めると、彼が言った様にカフカは危機を脱して現実の世界に復

帰している。

カラス少年は、カフカの思いや考えていることを再考し、本人が迷い葛藤していることに助言を与える「もう一人の自分」が人格化したものようである。本人もどこかでそれでいいのかと疑問に思っていることの問題性を明確にし、状況や自分のあり方を考え直すことで、結果的に本人の適応に役立ち発達を促すものになっていると思われる。

田村カフカは15才なのにメタ認知能力が非常に高いことを論じたが(山岸2005)<sup>28)</sup>、その一つの理由はカラスと呼ばれる少年がメタ認知的な働きをしているからと考えられる。彼はカフカが何か考えたり行動をすると、それを言語化し、どこに問題があるのか、このままでいいのかをチェックし、これからの方向性を示唆してくれる。メタ認知とは「自分の認知過程を監視し、行動目標に合っているか評価し、自分の行動をコントロールすること」であり(例えば三宮(2008)<sup>29)</sup> etc.)、近年学習を進める上で重要なプロセスとして注目されている。メタ認知は本人が自分の認知について行うものだが、カフカ少年の場合は別の人格の声としてそれを行っていると考えられる。それは言語が内面化して思考になる前に、子供が「外内言」として独り言のように考えていることを口にすること<sup>30)</sup>と似ている。(但し前述の様に、カラス少年の言っていることの的確性、メタ認知能力の高さは、発達心理学的には15才の少年の別人格としては無理があると思われる。)

## V. 考 察

以上、6つの文学作品に登場する、主人公のつらさを支え適応に寄与する機能をもつ「想像上の仲間」について論じてきたが、表1に1)彼らの出現時期、2)出現状況(どのような状況で出現したか)、3)彼らと主人公の同質性/異質性、4)主人公は彼らを意識的・意図的に創造したのか否か、5)彼らが果たす機能を

まとめた。

出現時期は6作品とも児童期から思春期であった。ファンタジーものは幼児期が多いのに対し、「主人公のつらさを支え適応機能をもつ仲間」は児童期から思春期にある者にもたれ、IIIで述べた「想像上の仲間」の2つの出現時期に対応しているといえる。

出現するのは、孤独で支えが必要な状況であることが多い。アンネ以外の5人の状況はかなり厳しく、心を開ける他者がいないというだけでなく、ごく当たり前の人間関係にも恵まれず、ひとりっぼっちでつらい状況に置かれている(アンネの場合も今はそうでもないが、近い将来つらい状況になることへの漠然とした予期が、少なくとも読者にはあると思われる)。

Sullivan(1953)は児童後期になると親密さへの欲求が起こり、それまでとは異なった「自分と同じ様にその人の幸福を求める友人」=親友を求めるようになるとした<sup>31)</sup>。それは「それまでの人格的歪みを修正してくれる」<sup>31)</sup>ような重要な存在なのだが、特に家庭からの支えが得られないような場合はその存在があるかどうかで適応が左右されるとする報告もある<sup>32)</sup>。この主人公たちは親密な他者も家庭からの支えもどちらも持つことができないため、親密な他者を自から空想の中で作ったといえる。それはつらい状況を生き抜くために彼らが生み出した方略であり、彼らの強さ—レジリエンスの源の一つなのであろう。

主人公と「想像上の仲間」の類似性に関しては、<脚注1~3>で述べた「適応機能をもつ想像上の仲間」に入れなかった「想像上の仲間」(「クマのプーさん」「ドラえもん」「トトロ」)がどれも人間ではないのに対して、同じ人間であり同質で似ているものが多かった(いけちゃん、本人ではなく別の人が創造したものであるため正体不明の生き物だが、実はその正体は後の恋人であり、異質な者ではない)。親友は共感・共鳴できる同質性と自分にはないようなよきものをもつ場合が多いが、マーニーは「(アンナとは違う)金髪の美

表1 6つの文学作品に登場する主人公と「想像上の仲間」の特性

作品名	主人公	出現時期	出現状況	類似性	意識性・意図性	機能
「アンネの日記」	アンネ	思春期	親友なし・(隠れ家生活)	同質	意識的	話相手→(情緒的安定)
「赤毛のアン」	アン	児童期	孤独一話相手なし・つらい状況	同質	意識的	話相手→(情緒的安定)
「悪童日記」	リュカ	児童期	孤独一話相手なし・つらい状況(危機的状況)	同質(双子)	意識的	話相手・共経験→(情緒的安定) 経験を伝える
「いけちゃんとおぼく」	ぼく	児童期	ひとりぼっち・つらい状況	異質(異生物)	意図なし	話相手・共経験→(情緒的安定)
「思い出のマーニー」	アンナ	思春期	誰とも親しくない・転地	同質(美少女)	無意識	親友と共に過ごす→情緒的安定 自分を見直す→洞察
「海辺のカフカ」	カフカ少年	思春期	誰とも親しくない・危機的状況	同質(優秀)	無意識	相談相手・助言者→情緒的安定 思考や行動の振り返り→第二の自己→メタ認知

しい子」だし、カラス少年はいつもカフカを先導しカフカは「彼の与えてくれる忠告には従うことにしていた」という様に優れた判断力を持つという違いもみられている。

意識性に関しては1の3人は意識的・意図的に「想像上の仲間」をつくり、いけちゃんは本人は作っていないが恋人がその必要性を感じて自分になりすましたものである(「ぼく」が実際にどのようにしてつらさを乗り越えてきたのかはわからないが、恋人は自分もそのようにして乗り越えてきた人なのだろう)。マーニーとカラスは意識の働きによるものではないが、本人も気づかずに危機を乗り越えるために自ら作り出したと考えられる。彼らの無意識的な対処はうまくいき、状況を好転させているが、危うさを孕んでいることも示唆されている。

カラス少年は主人公の適応に結果的に役立ったが、一方田村カフカは解離性障害の可能性もあるように描かれている。カラス少年の声がより優勢になり主人公のコントロールを超えれば、幻覚や妄想に発展したり、人格の統合が崩れて解離性障害になることも考えられる。アンナも、マーニー抜きで現実的に彼女の行動をみると、おかしい行動をしているともいえ(夜中に家を飛び出したり、溺死しそうになったりetc.)、河合(1981)<sup>26)</sup>は「たましいの次元に至る深い癒しの仕事が

行われる時、その人は精神病や自殺、事故死などの危険極まりない世界の近くをさまよわねばならない」と述べている。

機能に関しては、どの作品でも「想像上の仲間」は話相手のいない主人公が何でも話せる話相手になっていて、そのことで情緒的安定をもたらしている。アンネとアンの場合は自分が話したいと思った時に話をする相手であるが、リュカと「いけちゃん」のぼくにとってはいつも一緒にいて色々なことを一緒にする仲間、共に体験することで心細さやつらさが弱められ、情緒的安定だけでなく心強さやお互いの心のつながりももたらされている。彼らは「想像上の仲間」と「共にある」という一体感が強い一方、アンナはマーニーと親友として共に過ごすという交流の仕方、楽しさや情緒的安定と共に、話をする中でお互いの立場を思い遣ったり、アンナが自分を見直して自分への洞察を深める契機になっている。カフカにとってカラス少年は単なる話相手というより相談相手であり、困ったときに助言や忠告を与えてくれる存在である。情緒的安定を与えてくれると同時にカラス少年の言動は、自分の思考や行動を振り返る機会を与えてくれ、メタ認知の機能も果たしている。「想像上の仲間」の出現時期が思春期であるアンネ、アンナ、カフカの場合は、その交流が自分を振り返る機会にもなっており、「第2の自己」

の要素ももっているといえる。

## VI. 結 論

「想像上の仲間」に関して、幼児期の空想の世界で共に遊ぶファンタジーものではなく、主人公のつらさを支え適応に寄与する機能をもつという観点から、6つの文学作品に登場する「想像上の仲間」について考察を行った。主人公のつらさを支え適応に寄与する「想像上の仲間」は1) 孤独で支えが必要な状況にある者の児童期・思春期に出現し、2) 児童期の場合は話相手や共に体験をする者として現れ、思春期の場合は話相手という面もあるが、交流を通して自分を振り返る機会をもたらしている。3) その仲間は基本的に自分と同質の者で、本人が自ら創造しているが、意識的・意図的に創造する場合と意図しない場合があり、意識的でない場合の方が大きな問題を抱えている可能性が示唆された。

## 文 献

- 1) Winnicott, D.V. : *Playing and reality*, 1953, 橋本雅雄訳、遊ぶことと現実、岩崎学術出版社、東京、1979.
- 2) Bowlby, J. : *Attachment and loss. Vol.1*, 1969. 黒田実郎他訳、母子関係の理論 I 愛着行動、岩崎学術出版社、東京、1976.
- 3) Stevenson, O. : *The first treasured possession, The Psychoanalytic Study of the Child. 9*, 199-217, 1954.(井原(2006)<sup>4)</sup>による)
- 4) 井原成男 : 移行対象の臨床的展開—ぬいぐるみの発達心理学、岩崎学術出版社、東京、2006.
- 5) Horton, P.C. : *Solace : The missing dimension in psychiatry*, 1981, 児玉憲典訳、移行対象の理論と臨床—ぬいぐるみから大洋体験へ—、金剛出版、東京、1985.
- 6) 遠藤利彦 : 移行対象の発生的解明—移行対象と母性的かかわり、発達心理学研究、1、59-69、1990.
- 7) Lazarus, R.S. & Folkman, S. : *Stress, appraisal, and coping*, 1984, 本明寛他監訳、ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究、実務教育出版、東京、1991.
- 8) Svendsen, M. : *Children's imaginary companions, Archives Neurology and Psychiatry*, 32, 985-999, 1934.(山口(2006)<sup>10)</sup>による)
- 9) 山下景子 : 想像の仲間、山中康裕監修、魂と心の知の探究、創元社、東京、64-70、2001.
- 10) 山口 智 : 想像上の仲間に関する研究—二つの発現開始時期とバウムテストに見られる特徴、心理臨床学研究、24 (2)、189-200、2006.
- 11) 森口佑介 : 空想の友達—子どもの特徴と生成メカニズム—、心理学評論、57 (1)、529-539、2014.
- 12) Taylor, M. : *Imaginary companions and the children who create them*, Oxford University Press, New York, 1999.
- 13) 麻生 武 : ファンタジーと現実、金子書房、東京、1996.
- 14) 森定美也子 : 乳幼児期から青年期までの移行対象と慰める存在、心理臨床学研究、16、582-591、1999.
- 15) 犬塚峰子・佐藤至子・和田香誉 : 想像上の仲間に関する調査研究、児童青年精神医学とその近接領域、32 (1)、32-48、1991.
- 16) Nagera, H. : *The imaginary companion : Its significance for ego development and conflict solution, The Psychoanalytic Study of the Child*, 24, 165-196, 1969.(井原(2006)<sup>4)</sup>による)
- 17) Milne, A.A. : *Winnie-the-pooh*, 1926, 石井桃子訳、クマのプーさん、岩波書店、東京、1957.
- 18) Frank, A. : *Anne Frank diary, 1947-1991*, 深町真理子訳、アンネの日記、文芸春秋、東京、2003.
- 19) Montgomery, L.M. : *Anne of Greengables*, 1908,

- 村岡花子訳、赤毛のアン、新潮社、東京、2008.
- 20) Kristof, A. : *Le grand cahier*, 1986, *La prevue*, 1988, *Le troisieme*, 1991, 堀茂樹訳、早川書房、東京、悪童日記、2001、ふたりの証拠、2001、第三の嘘、2002.
- 21) 山岸明子：発達心理学の観点から見た「赤毛のアン」の成長の妥当性、順天堂保健看護研究、3、52-61、2015.
- 22) 山岸明子：アゴタ・クリストフの「悪童日記」三部作における主人公の育ちと対人関係のあり方、医療看護研究、11(2)、42-49、2015.
- 23) 西原理恵子：いけちゃんとおぼく、角川書店、東京、2006.
- 24) 宮崎 駿：となりのトトロ、徳間書店、東京、1988.
- 25) Robinson, J.G. : *When Marnie was there*, 1967, 松野正子訳、思い出のマーニー、岩波書店、東京、2003.
- 26) 河合隼雄：子どもの本を読む＜子どもとファンタジー＞コレクション 1、岩波書店、東京、1981/2013.
- 27) 村上春樹：海辺のカフカ、新潮社、東京、2002.
- 28) 山岸明子：発達心理学から見た「海辺のカフカ」-なぜ主人公は危機を乗り越えることができたのか、医療看護研究、1、8-15、2005.
- 29) 三宮真知子：メタ認知-学習力を支える高次認知機能、北大路書房、京都、2008.
- 30) Vygotsky, L.S. : *Thought and language*, 1934, 柴田義松訳、思考と言語、明治図書、東京、1962.
- 31) Sullivan, H.S. : *The Iinterpersonal theory of psychiatry*, 1953, 中井久夫他訳、精神医学は対人関係論である、みすず書房、東京、1990.
- 32) Gauze, C. , Bukowski, W.M., Aquan-Assee, J., & Sippola,L.K. : *Interactions between family environment and friendship and associations with self-perceived well-being during early adolescence*, *Child Development*, 67, 2201-2216, 1996.